瀬戸窯における陶製狛犬の製作年代

井上 喜久男

はじめに

瀬戸窯における陶製狛犬は、鎌倉時代から江戸時代を経て明治初めまで焼かれたもので、神社等に奉納されたものである。それらの鎌倉時代から明治までの約500年間の狛犬は、時代の変化と窯業技術の進展に応じて碗・皿・鉢などの生活什器の生産とともにその形態の変遷が認められている。

愛知県陶磁資料館には本多静雄氏寄贈の狛犬コレクションを中心として219点を所蔵している(註1)。その狛犬研究は今日まで本多氏の研究(註2)を始めとして進められてきている。その中の江戸時代の狛犬は、体部の背部を中心に奉納した年代、奉納先、紀年、願主、作者などが刻銘されていることが多く、製作年代の基本的な資料として重要な役割を果たしているが、それ以前の鎌倉時代から安土桃山までの狛犬には紀年銘がほとんどない状況である。

しかし、窯跡から出土している狛犬は、残欠片として出土する場合がほとんどで、全体の形態が復元できないものが多いが、狛犬以外の重要な焼成器種による編年に基づいて狛犬の製作年代を推定することができる。

現在、鎌倉から江戸初期までの伝世狛犬は、本多コレクションおよび、神社に伝世しているものを合わせると、50例ほどが確認できる。

そこで、本論のテーマは、狛犬の伝世品および窯跡と集落遺跡の出土品を基にして、狛犬の焼成が始まる鎌倉期から室町・安土桃山期を経て江戸初期までの陶製狛犬の展開を考えてみようとするものである。

1 陶製狛犬の資料調査

先に触れたように、陶製狛犬研究は本多静雄氏を中心として戸田紋平氏(註3)、赤塚幹也氏(註4)、楢崎彰一氏(註5)らによって進められてきた。それらの研究は紀年銘資料と窯跡の発掘調査に伴う編年的研究の進展によって製作年代が考察され、年代観が形成されてきたと言ってよい。

これまでの狛犬研究は伝世品と窯跡出土品を中心に、その形姿の展開を見るために元亨4年(1324)銘が確認された萱刈窯の狛犬を標式型として「萱刈型」、深川神社に伝世する陶祖藤四郎作と伝承されている狛犬を「深川型」、伊勝八幡宮に伝わる応永25年(1418)墨書銘の狛犬を「伊勝型」、香取神社に伝わる狛犬を「香取型」、千利休所持の伝承を持つ狛犬を「根津型」とそれぞれ型式を定め、型式の展開とその年代を考察している。

今回のテーマは、これまでの狛犬研究を踏まえて、考古学から見た狛犬の編年的な展開過程を見てみようとするもので、窯跡出土品と伝世品からその型式を確認しながら、それらの展開過程を年代的に考えて見ることにする。狛犬は鎌倉から明治初期まで製作されて神社等に奉納されてきたものであり、長い期間の変遷過程があり、作品数が多く、紀年銘等により年代が比較的判断できる江戸時代を除いた鎌倉期から江戸初期までの狛犬を扱うことにする。

調査は窯跡および消費遺跡からの出土資料を基にして狛犬の多様な形態を確認することから始め、考古学から見た年代的な変遷過程を考えてみることにする。

(1) 灰釉狛犬　洞山窯跡出土（挿図 1）

瀬戸窯跡で確認される最古の狛犬で、細身の湾曲する体部に貼付突帯に線刻文が入った鬣が特徴である。

(2) 灰釉狛犬　萱刈窯跡出土　高さ 23.7 cm　瀬戸窯業高校蔵（挿図 2）

萱刈窯跡がら出土した狛犬を［萱刈型］と分類して呼んだ標式狛犬である。獅子顔で眉が太く盛り上がり、目は瞳眼造りで、鬣は貼付突帯に線刻文が施されている。狛犬は台座板上に据えられたもので、「□亨四年八月」（1324 年）銘の台座と、「正中二年」（1325 年）銘の陶板（挿図 3）が伴出している。

(3) 鉄釉狛犬　赤津長根窯跡出土　高さ 11.0 cm　瀬戸市教育委員会蔵（挿図 3）

獅子顔で瞳眼の造形で、鬣は突帯刻線文様である。一部欠損品で、台座板がない。右挿図は肉角が太く長く、鬣が櫛目文で施されている。

(4) 灰釉狛犬片残欠　孫右衛門窯跡出土　愛知県陶磁資料館蔵（挿図 4）

獅子顔瞳眼の狛犬で、前足が前に出るように付いているのが特徴である。前足の毛並み表現が後ろ側へ鰭状に付いている。鬣は突帯刻線文様で、別の資料に山犬形のものがあり、鬣の先端を丸く巻き毛状の表現となっている。

(5) 灰釉狛犬残欠　鶯窯跡出土　愛知県埋蔵文化財調査センター蔵（挿図 5）

東海環状自動車道路の建設のために発掘された鶯窯跡から出土したものである。鶯窯跡は丘陵頂部の先端に煙道が位置し、床面傾斜が窯体上方で 51 度となるこの時代にはほとんど確認されないほどの急傾斜の窯であり、焼成品の陶片は淡緑色に呈色した還元焔焼成されている。出土した狛犬は残欠片のため全体の形態が判りにくいが、台座板が付き、前足の足首に輪状の突帯が巡り、前足の毛並みが写実的に全面に櫛目文が施され、足先の爪も表現されている。鶯窯は瀬戸窯後期初めに編年される窯跡であり、窖窯 10 期（1370-1400）の 14 世紀末に比定される窯跡である。

(6) 灰釉狛犬　高さ 30.0 cm　豊蔵資料館蔵（挿図 6）

鶯窯跡出土の狛犬残欠片の特徴を持った伝世品が確認されている。獅子顔瞳眼で頬が丸く盛り上がり、前足の足首に輪状の突帯をめぐらす特徴が共通している。窯跡出土残欠片では判らなかった全体の形態が明らかとなり、鬣は貼付突帯線刻文様で、胸が大きく張り出し、体部には波状の毛並みが全体に表現され、胸毛が表現されている。

(7) 灰釉狛犬後足残欠　愛知県陶磁資料館蔵（挿図 7）

出土地不詳の残欠片で、毛並みが全体に表現されていること、先端の爪まで写実的な表現が施されていることは、鶯窯跡出土狛犬片の特徴が認められる。

(8) 灰釉鉄彩狛犬　高さ 34.0 cm（挿図 8）

挿図１　灰釉狛犬残欠
洞山窯跡出土

挿図２　灰釉狛犬
萱刈窯跡出土

挿図３　鉄釉狛犬
赤津長根窯跡出土

挿図４　灰釉狛犬残欠
孫右衛門窯跡出土

挿図５　灰釉狛犬残欠
鶯窯跡出土

挿図６　灰釉狛犬

挿図７　灰釉狛犬残欠

挿図８　灰釉鉄彩狛犬

前足に輪状の突帯が表現されていること、体部に刻線文様が施されることなどは鶯窯跡の特徴に共通するもので、同様な年代観が推定される。

(9) 灰釉狛犬　高さ 5107 cm　深川神社蔵（挿図 9）

瀬戸市・深川神社蔵の大形の灰釉狛犬で、陶祖藤四郎作と伝承されてきたものである。山犬形瞳眼で、鬣は先端の巻き毛が丸い突帯で二重に表現され、櫛目刻線文様が施されている。全体が黒く汚れが付着しているが、縞状に灰釉が流れている。前足は付け根が盛り上がり、足先を板状の台座に据えられたものであるが、台座の前方部がとともに左前足が欠失している。

(10) 灰釉狛犬残欠　横根窯跡出土　愛知県陶磁資料館蔵（挿図 10）

前足の先端部分が丸く厚造りで、爪先は線刻文で表現されている。灰釉は厚く掛かって光沢がある。

(11) 鉄釉狛犬一対　高さ 33.2 cm　伊勝八幡宮蔵（挿図 11）

［伊勝型］と言われている瞳眼の山犬形で、太い隆帯の眉毛にぴんと張った耳、衿毛を両側へ配し、鼻筋に横皺を三段に入れ、鬣は花弁状の貼付突帯に細かい櫛目文が施されている。台座に正置し、台座の底面には「應永廿五戊戌歳　十二月朔日　熊野　願主　浄通」（1418 年）墨書銘がある。底面を除いて黒釉がかけられている。

(12) 鉄釉狛犬一対　高さ 20.2 cm　名古屋市博物館蔵（挿図 12）

［伊勝型］の瞳眼狛犬で、台座の上に蹲踞している姿は、伊勝八幡宮蔵のものと同様であるが、鬣の櫛目文様が粗いものとなり、衿毛が幅広く、上面の櫛目刻文が太い平行線状となって飾り帯のような趣がでてきたものとなっている。鉄釉は良く溶けて茶褐色に呈色している。

(13) 鉄釉狛犬、灰釉・鉄釉掛け分け狛犬　千葉県柏市・玉崎神社蔵（挿図 13）

［伊勝型］の瞳眼狛犬で、右側の狛犬は灰釉・鉄釉が掛け分けされ、衿毛の下に胸毛が施されている珍しいもので、前足首に突帯が巡っている。

(14) 鉄釉狛犬一対　高さ 24.5 cm　鹿島神宮蔵（挿図 14）

［伊勝型］の瞳眼狛犬で、山犬形で立て耳、鼻皺、衿毛、貼付突帯鬣、剣先爪先の特徴を持っている。鬣は毛の先端部を表現する半円形の貼付文のみで、櫛目文が省略されている。鉄釉は黒色に茶褐斑文の呈色が見られ、後ろ足の膝は丸く表現されている。

(15) 鉄釉狛犬一対　高さ 24.3 cm　豊蔵資料館蔵（挿図 15）

［伊勝型］の瞳眼狛犬で、鬣の刻線文がなくなり、先端部の半円形の突帯文のみとなった鹿島神宮蔵の一対の鉄釉狛犬と類似した形態をしているが、衿毛が飾り帯に変化しているところが大きく異なっている。細部では眉毛の隆帯状の刻線文が細線に変化していること、鼻筋が少し長くなって目と葉上下位置が長くなって面長の形態に移行しているが、前足の剣先爪先、後足の膝が丸いことは踏襲している。すなわち［香取型］の白眼狛犬の形態との共通要素が生まれている。鉄釉が施され、茶褐色の地に黄白濁色の斑点が特に吽形の方に呈色している。

(16) 鉄釉狛犬残欠　清須市・清洲城下町遺跡出土　愛知県教育委員会蔵（挿図 16）

頭部残欠片であり、眉毛が太く捻れた刻線が施されていることから［伊勝型］と推定される。

挿図 9　灰釉狛犬
深川神社伝来

挿図 10　灰釉狛犬残欠
横根窯跡出土

挿図 11　鉄釉狛犬一対

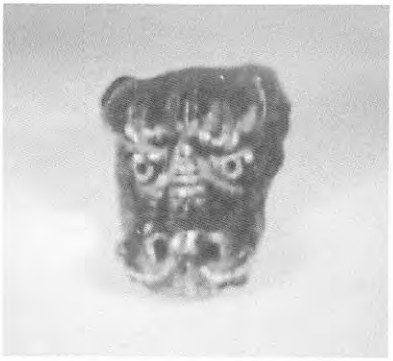
挿図 12　鉄釉狛犬一対

挿図 13　鉄釉・灰釉狛犬

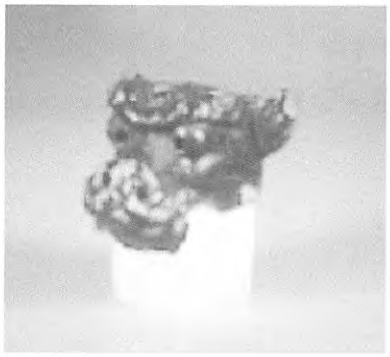
挿図 14　鉄釉狛犬一対

挿図 15　鉄釉狛犬一対

挿図 16　鉄釉狛犬残欠
清洲城下町遺跡出土



挿図 17　鉄釉狛犬残欠
夕日窯跡出土



挿図 18　鉄釉狛犬残欠
赤津川採集

挿図 19　鉄釉狛犬残欠
惣作鐘場遺跡出土

挿図 20　灰釉狛犬

挿図 21　灰釉狛犬一対

挿図 22　鉄釉狛犬

挿図 23　灰釉狛犬

挿図 24　灰釉狛犬

（17）鉄釉狛犬残欠　夕日窯跡出土（挿図 17）

［伊勝型］の瞳眼狛犬の残欠。

（18）鉄釉狛犬残欠　瀬戸市・赤津川採集　愛知県陶磁資料館蔵（挿図 18）

［伊勝型］瞳眼狛犬の残欠。

（19）鉄釉狛犬残欠　瀬戸市・惣作鐘場遺跡出土　愛知県埋蔵文化財調査センター蔵（挿図 19）

上部が欠損しているため、型式が定かではないが、台座が周縁に沿うように抉られている。他に類例を見ないもの。

（20）灰釉狛犬　高さ 18.2 cm　愛知県陶磁資料館蔵（挿図 20）

［香取型］の狛犬で、香取型は白眼、鼻筋が長く面長、前垂れ耳、飾り帯、櫛目鬣、前足の剣先爪先、台座板に蹲踞し、膝が三角に尖る形態の狛犬である。尾は湾曲する 1 本尾である。

（21）灰釉狛犬一対　高さ 17.9 cm　香取神宮蔵（挿図 21）

［香取型］の標式狛犬で、灰釉は厚く光沢があり、マット調である。

（22）鉄釉狛犬　高さ 23.2 cm　伊勝八幡宮蔵（挿図 22）

［香取型］の鉄釉狛犬で、香取型の特徴の白眼、鼻筋が長い面長、前垂れ耳、飾り帯、櫛目鬣、前足の剣先爪先が認められる。標式の香取神宮の狛犬より太めで年代的は下がるものと推定される。

（23）灰釉狛犬　高さ 18.9 cm　愛知県陶磁資料館蔵（挿図 23）

［根津型］の白眼狛犬である。根津型の特徴は［香取型］の特徴を基本として、短い鼻筋に大きな鼻、強調された前足の剣先爪先、膝が丸い整形、体躯が太く直立した蹲踞となるものである。年代的には［香取型］から［根津型］へ展開するものと推定される。

（24）灰釉狛犬　高さ 16.9 cm　根津美術館蔵（挿図 24）

［根津型］の標式狛犬である。千利休所持の伝承をもつ狛犬で、阿形の頭部を打ち割って香炉に転用されたものである。櫛目鬣が粗い隆帯櫛目文となり、後足の膝が三角に尖っている。

（25）灰釉狛犬残欠　横峰窯跡出土（挿図 25）

［香取型］の形態と推定される頭部残欠である。

（26）灰釉狛犬　高さ 20.0 cm　愛知県陶磁資料館蔵（挿図 26）

［香取型］基本形態の異形で、鼻筋皺があること、鬣が波形の襞状に整形されて、その先端が貼付突起で表現されているもので、尾が三つ又巻き毛となっている。山犬形と獅子形の折衷型とするよりも独立した型式の可能性が考えられる。

（27）鉄釉狛犬　高さ 30.8 cm　鹿島神宮蔵（挿図 27）

［伊勝型］と［香取型］の折衷型の鉄釉狛犬で、伊勝型の立て耳、鼻筋皺があること、香取型の白眼、鼻筋が長い面長、飾り帯、櫛目鬣が合体した形態となって、前足の膝が三角に尖っている。香取型の形態比率が高い折衷型の異形である。

（28）鉄釉狛犬一対　高さ 23.7 cm　愛知県陶磁資料館蔵（挿図 28）

［伊勝型］と［香取型］の折衷型とも言える形態で、瞳眼、立て耳、鼻筋皺を持つ［伊勝型］に飾り帯、櫛目鬣の［香取型］の形態が合わさった狛犬である。鉄釉は良く溶けて茶褐

挿図 25　灰釉狛犬残欠
横峰窯跡出土

挿図 26　灰釉狛犬

挿図 27　鉄釉狛犬

挿図 28　鉄釉狛犬一対

挿図 29　鉄釉狛犬
正明寺城之前遺跡出土

挿図 30　鉄釉狛犬

挿図 32　灰釉狛犬残欠
日向窯跡出土

挿図 31　鉄・灰釉狛犬一対

挿図 33　灰釉狛犬残欠
山口八幡 2 号窯跡出土

色に呈色して光沢がある。

（29）鉄釉狛犬　高さ 31.5 cm　岐阜市・正明寺城之前遺跡出土　岐阜市教育委員会蔵（挿図 29）

［伊勝型］と［香取型］の折衷型で、櫛目鬣が細かいことから、30・31 の狛犬よりも古式の様相を持つものである。

（30）鉄釉狛犬　高さ 20.7 cm　愛知県陶磁資料館蔵（挿図 30）

［伊勝型］と［香取型］の折衷型の異形である。折衷型には瞳眼、櫛目鬣は共通しているが、飾り帯が飾り縄に替わり、立て耳が前垂れ耳となっている。造形的には前足の表面が面取状に箆仕上げされていること、後足の膝が前足と同様に面取り仕上げされている。櫛目鬣は粗く施され、年代的に下がると考えられるものである。鉄釉は黒色に呈色し、光沢がある。

（31）鉄・灰釉狛犬一対　高さ 21.5 cm　愛知県陶磁資料館蔵（挿図 31）

前出のものと同様な形態の［伊勝型］と［香取型］の折衷型異形である。その特徴である前垂れ耳、飾り縄が認められ、前足と後足の調製は面取状の仕上げと、後足にも櫛目文が施されている。前足の爪先は線刻文で表現され、櫛目鬣は粗く短く、重ねられていずれも年代的に下がるものと推定される。頭部から上半部に鉄釉と下部の灰釉が掛け分けられている。

（32）灰釉狛犬残欠　土岐市・日向窯出土　愛知県陶磁資料館蔵（挿図 32）

台座に据えられた狛犬の下方部分で、後足の表面に櫛目文が施されている。

（33）灰釉狛犬残欠　瀬戸市・山口八幡 2 号窯跡出土　瀬戸市教育委員会蔵（挿図 33）

頭部と足の小残欠片のため、全体の形態が不明である。足は面取状の仕上げが施され、鼻筋が短く、鼻先が大きいことから根津型の造形と見られる。

（34）鉄釉狛犬　高さ 19.5 cm　愛知県陶磁資料館蔵（挿図 34）

［伊勝型］から展開形であり、表情が軽妙となり、衿毛および飾り帯がなくなり背には円錐形の突起が付けられている。前足は付け根が外側へ張り出すように付けられており、正面から見ると威風堂々となるように蹲踞の姿勢を強調し、後足は粘土板の貼付成形である。

（35）鉄釉狛犬　高さ 23.5 cm　愛知県陶磁資料館蔵（挿図 35）

前出の狛犬と同形態のもので、［伊勝型］から展開形であり、表情が軽妙となり、衿毛および飾り帯がなくなり背には円錐形の突起が付けられている。前足は付け根が外側へ張り出すように付けられており、正面から見ると威風堂々となるように蹲踞の姿勢を強調し、後足は粘土板の貼付成形である。

（36）鉄釉狛犬　高さ 20.5 cm　瀬戸市・菊畑窯跡出土（挿図 36）

窖窯最終末期の菊畑窯から出土した狛犬であり、窯跡の年代により 15 世紀末期に位置付けられる。口先が上向きとなり、丸い瞳眼のおどけた顔となり、鬣の先端の位置に円錐形の突起が付けられ、後足は粘土板の貼付である。

（37）灰釉狛犬　高さ 23.0 cm　瀬戸市・菊畑窯跡出土（挿図 37）

残欠片のため台座板が欠失している。体部が円筒形となり、体部と頭部が連続し、円筒の先端に顔が付けられ、体部・前足に斜行沈線が施されている。

（38）灰釉狛犬　高さ 12.2 cm　出土地不詳（挿図 38）

台座板に蹲踞する狛犬の基本形から外れた造形のもので、体部の円筒化、前足・後足の丸紐化に変化し、顔の目鼻立ち、表面に斜行沈線が施された装飾法は、伝菊畑窯跡出土の狛犬

挿図 34　鉄釉狛犬

挿図 35　鉄釉狛犬

挿図 36　鉄釉狛犬
菊畑窯跡出土

挿図 37　灰釉狛犬
菊畑窯跡出土

挿図 38　灰釉狛犬

挿図 39　鉄釉狛犬
昔田窯跡出土

挿図 40　鉄釉狛犬
小名田窯下 1 号窯跡出土

に類似している。

（39）鉄釉狛犬　高さ 15.1 cm　昔田窯跡出土　瀬戸市教育委員会蔵（挿図 39）

2003-4 年に瀬戸市埋蔵文化財センターにより大窯初源期の解明のため、大窯初期の昔田窯の学術調査が行われて、出土したものである。窯は 1968 年の瀬戸市史編纂に伴う発掘調査が行われた窯跡の他に窖窯最終末期 1 基と大窯初源期の 1 基が計 2 基が検出された。狛犬は窯の上段域にある作業場と推定されるところから出土し、正確的に 3 基のどの窯に伴う製品かどうかは未定である。円筒形の体部に丸紐状の前足・後足と貼付、頭部・顔は体部の円筒の端に貼り付けた粘土板の瞳眼・鼻と貼り付けた扁平化した造形のものであり、大窯期に属するものと推定されるものである（註 6）。

（40）鉄釉狛犬　高さ 17.8 cm　多治見市・小名田窯下 1 号窯跡出土（挿図 40）

大窯初源の大窯 I a 期に編年される狛犬で、昔田窯跡出土品と造形が類似する。円筒形の体部、扁平な顔付、丸紐状の足がその特徴である。

（41）鉄釉狛犬残欠　瀬戸市・桑下東窯跡出土　愛知県埋蔵文化財センター蔵（挿図 41）

大窯 I a 期に編年される窯跡からの出土品で、残欠片ではある。座台板に蹲踞すること、円筒形の体部に丸紐状の前足・後足が付けられ、頭部が欠失し、粘土板が貼り付けられて造形されているものと推定され、口先の下顎の出っ張りが僅かに確認できる。

（42）鉄釉狛犬残欠　瀬戸市・勘介窯跡出土（挿図 42）

前出の桑下東窯跡出土品と類似し、円筒形の体部に丸紐状の前足・後足が付けられ、頭部の粘土板が欠落してしまっていることが判る。

（43）鉄釉狛犬残欠　可児市・浅間神社出土（挿図 43）

前出の勘介窯石出土品と同様に、体部のみの残欠である。円筒形の体部、丸紐状の前足・後足が付けられ、粘土板を貼り付けた頭部が欠落したものである。

（44）鉄釉狛犬　高さ 16.3 cm　出土地不詳　瀬戸市教育委員会蔵（挿図 44）

台座板に蹲踞し、円筒形の体部に丸紐状の前足・後足が付けられ、頭部・顔は粘土板を円筒端に貼付て目・鼻を造作したものである。大窯 I 期に編年されるものであるが、同期に編年されるその他の窯跡出土狛犬と比較し、この資料のみが白眼である。

（45）鉄釉狛犬　高さ 19.5 cm　八丈島・優婆夷神社出土、伝美濃古窯跡出土（挿図 45）

左は顔の目鼻が平面上に並ぶ扁平化した顔付に貼付板に櫛目文を施した鬣、胸に飾り帯で、［伊勝型］の異形狛犬の造形である。総体は円筒形の体部に丸紐状の後足の造形であり、大窯期の様相を示している。鬣が櫛目文がない半円突帯文のもので、失透性の銹釉状が掛けられ、優婆夷神社狛犬が美濃窯製品である可能性を示唆している。

（46）鉄釉狛犬残欠　伝美濃窯出土（挿図 46）

美濃窯跡からの出土品で、鉄釉は良く溶けて黒褐色の光沢がある。前記の狛犬の銹釉と異なるもので、焼成温度により光沢釉となるものと考えられる。

（47）鉄釉狛犬一対　高さ 20.6 cm　西尾市・久麻久神社蔵（挿図 47）

顔付に大きな特徴が認められる。眉毛と目が一体となりメガネ猿のようであり、鼻と口先が平面状になり、正面三角形状に大きく強調され、前足は付け根が横に張り出して台座板に蹲踞し、威風堂々の造形である。総体は円筒形の体部に丸紐の前足・後足を貼り付けた大窯期に編年されるものである。

挿図 41　鉄釉狛犬残欠
桑下東窯跡出土

挿図 42　鉄釉狛犬残欠
勘介窯跡出土

挿図 43　鉄釉狛犬残欠
浅間神社出土

挿図 44　鉄釉狛犬

挿図 45　鉄釉狛犬
八丈島・優婆夷神社出土

挿図 46　鉄釉狛犬残欠

挿図 47　鉄釉狛犬一対

挿図 48　鉄釉狛犬残欠
清洲城下町遺跡出土

挿図 49　鉄釉狛犬

（48）鉄釉狛犬残欠　清須市・清洲城下町遺跡出土　愛知県埋蔵文化財調査センター蔵（挿図 48）

底部を欠く残欠品で、円筒形の体部に丸紐状の前足・後足が付けられている大窯期に編年されるものである。頭部は扁平状の顔付きに造形され、鼻が大きく三角形に強調されているのが特徴である。本品は天文 2 年（1555）頃から天正 14 年（1586）までの間に掘削された土坑に廃棄されたものである。類品として前記 47 の久麻久神社蔵の狛犬がある。

15 世紀末に大窯生産への転換が行われると、狛犬の形態は新型の昔田窯跡、小名田窯下窯跡などから出土した円筒の体部のものに転換する。大窯Ⅱb 期（1550-70）に編年される勘介窯跡出土の狛犬まで初期の形態が変遷するものと考えられ、天正年間に入って大きく顔面の鼻を大きく三角状にし、瞳眼をメガネ猿のごときの形態になる可能性が高いと推定され、大窯Ⅲ期（1570-1580）に比定される。

（49）鉄釉狛犬　高さ 23.5 cm　愛知県陶磁資料館蔵（挿図 49）

円筒形の体部に丸紐状の前足・後足が付けられている大窯期に編年される狛犬である。頭部が大きく造形され、顔が軽妙な獅子の造形で、上向きとなり、直立した姿勢である。大窯期の狛犬としては衿毛と後足に毛並みが刻線で表現され、円筒形の胴部に繋がる頭部が大きく強調されて造形されている。

（50）鉄釉狛犬　高さ 15.7 cm　愛知県陶磁資料館蔵（挿図 50）

前記の狛犬に類似し、軽妙な獅子型の顔が上向きとなり、頭部が大きく造形されている。前足は付け根が横に張り出して、正面形を強調している。

（51）黄瀬戸獅子型香炉　高さ 13.0 cm　根津美術館蔵（挿図 51）

16 世紀の狛犬は大窯Ⅰa 期に編年される窯跡出土品のみが知られのみで、それ以降にどのように形態の狛犬が展開するのか未詳である。大窯Ⅰa 期の狛犬は、瀬戸窯では昔田窯跡、桑下東窯跡、美濃窯では小名田窯下 1 号窯跡の出土品が知られて大窯初源期の様相が確認できる。しかし、それ以降となると伝世品の数が少なく、桃山期の狛犬の様相が全く掴めていないのが現状である。この時期の形象陶器の生産という視点で作品を見ていくと、鉄釉猿形水滴、志野猿形水滴、鉄釉及び志野福良雀形水滴、黄瀬戸獅子形香炉、織部南蛮人燭台などが存在している。

この黄瀬戸香炉は袴腰形香炉に倣った器形を基本とし、頸部に獅子頭を象って貼り付け、底部に 4 本の獣足を付けて香炉の脚とし、獅子に見立てた形象形香炉に造形した蓋付香炉である。体部の肩部と腰・脚部には刻線による毛並みが表現されている。獅子頭は正面からみる造形となり、目・鼻・前歯が強調されて造形されている。黄瀬戸釉は全体に淡黄色を呈して、ところどころに白濁する暗黄緑色の釉溜まりが彩りを見せている。本品は猿形鈕の造形からみて大窯Ⅴ期（1590-1607）に編年される文禄から慶長前期（16 世紀末～17 世紀初）に編年されるものと推定されるもので、狛犬の頭の造形の参考品として紹介する。

（52）鉄釉狛犬　慶長拾四年銘　高さ 14.5 cm（挿図 52）

太い体部に丸紐状の前足・後足が付けられた狛犬で、背に「きしん　九右エ門　慶長拾四年　六月吉日」（1609）の刻銘がある。同様の狛犬は都合 3 体が確認されており、いずれも同じ刻銘があり、舌を出して歯らしき線刻表現がみられることから阿形と考えられている。しかし、阿形ばかりで吽形がないことから、本多静雄氏は全く同じ造形のものばかりが存在

挿図 50　鉄釉狛犬

挿図 51　黄瀬戸獅子形香炉

挿図 52　鉄釉狛犬
慶長拾四年銘

挿図 53　総織部狛犬

挿図 54　青織部獅子形香炉

挿図 55　総織部獅子鈕香炉
慶長拾七年銘

することに疑問を提され、狐つきを落とすためにお犬様または権現様と呼ばれる犬形を信者に分かつものとも考えている。また、同狛犬には寄進者名が刻銘されていることから狛犬と同様な信者が神社に奉納したものであり、狛犬の奉納の風習とお犬様の風習が混交されているものと考えている。造形的には円筒形の体部に丸紐状の前後足が付けられる形態であり、大窯期に属している。

（53）総織部狛犬　高さ 23.0 cm　愛知県陶磁資料館蔵（挿図 53）

銅緑釉が掛けられた総織部狛犬で、顔は瞳眼に彫刻され、粘土塊を貼り付けて瞳眼にする手法と違って彫刻作品である。台座板に蹲踞し、丸紐状の前足と後足を付ける造形は従来の手法を踏襲している。慶長後期から元和初期の年代が推定される。

（54）青織部獅子形香炉　高さ 14.5 cm（挿図 54）

香炉の蓋が獅子頭に彫刻されているものです。前出の総織部狛犬と同様に顔面が彫刻により造出されているもので、元和初期の年代が推定される（註 7）。

（55）総織部獅子鈕香炉　高さ 20.9 cm　東京国立博物館蔵（挿図 55）

「慶長拾七年　熱田太神宮」銘（1612）がある獅子鈕蓋付香炉である。獅子頭は瞳眼に彫刻されているもので、前記の黄瀬戸香炉同様の彫刻の造形となっている。織部陶器には南蛮人燭台も存在し、顔面の造形は彫刻手法に拠っている。香炉に付加された形象は狛犬と違って精緻な造形意識の違いが認められる。

2　中世窖窯期の狛犬編年

（1）窖窯 7 期（1280-1310）の狛犬

狛犬の最古例は 13 世紀後半代に生産が始まり、洞山窯跡出土品がある。しかし、洞山窯跡出土品は、半身の体部と前足が接合された残欠片のため、頭部・顔面の造形、足・台座の形態が不詳である。洞山窯跡については伴出遺物が確認されていないので製作年代を推定できにくいのが現状である。造形的な特徴は、頭部の鬣を紡錘状の貼付粘土紐を貼り付け、線刻文様が施されている。

14 世紀代の窖窯 8 期（1310-40）になると、元亨 4 年（1324）紀年銘の眉毛が太い獅子顔の狛犬が登場し、［萱刈型］と分類している。

［萱刈型］狛犬の特徴は下記の通りである。

(1) 瞳眼
(2) 獅子顔
(3) 前垂れ耳
(4) 貼付線刻文の鬣
(5) 貼付刻線文の衿毛

萱刈型はその後も展開し、窖窯 9 期（1340-70）の孫右衛門窯出土の狛犬へと変遷する。孫右衛門窯には獅子顔ともう一つ形態の違う山犬顔の狛犬が出土している（註 8）。

（2）窖窯 10 期（1370-1400）の狛犬

窖窯 10 期になると、瀬戸窯では後期様式と称している鶯窯跡出土の狛犬が存在する。鶯窯跡の出土品は［萱刈型］に属するもので、顔面の頬が大きく膨らみ、前足の足首に輪状突帯

が施されている特徴的な狛犬である。体部・足は波形の刻線文が施され、鬣は貼付刻線文、衿毛も刻線文とし、衿毛では貼付突帯の造形手法が廃れて刻線に移行していることが判る。この特徴を持つ狛犬が豊蔵資料館蔵品に存在する。

また、この期に相当すると考えられる狛犬に深川神社蔵の陶祖藤四郎作と伝える大形の狛犬があり、［深川型］と称されている。

［深川型］狛犬の特徴は下記の通りである。

(1) 瞳眼（二重）

(2) 山犬顔

(3) 立て耳

(4) 先端突起櫛目文の二段鬣

(5) 左右櫛目文の衿毛

深川神社蔵の灰釉狛犬は、火災禍に遇っていると言われ、黒く汚れが付着して本来の釉膚が見えないところが多いが、縞状に流下する淡緑色の灰釉が掛けられている。胸には左右に分けて引かれた櫛目文が胸毛表現として施されている。左前足と後足の先端部、台座板の前半部が欠失しているが、前足の爪先は丸く厚みがある表現がされており、台座板に蹲踞している姿勢のものである。この深川型にみるように、この期から山犬形の狛犬が登場するものと推定される。

（3）窖窯 11 期（1400-30）の狛犬

窖窯 11 期になると山犬形が定着し、応永 25 年（1418）墨書銘を持つ伊勝八幡宮蔵の鉄釉狛犬一対があり、［伊勝型］として分類している。

［伊勝型］狛犬の特徴は下記の通りである。

(1) 瞳眼

(2) 山犬顔

(3) 立て耳

(4) 鼻筋皺

(5) 先端突起櫛目文の一段鬣

(6) 左右櫛目文の衿毛

衿毛はあごの下から左右に幅広く帯状の様相を呈し、櫛目文は細かいものが古式と推定される。

また、この期は新たに白眼狛犬が登場する。白眼とは眼球の瞳が表現されていないものであり、香取神宮蔵の灰釉一対を標式として［香取型］狛犬として分類している。

［香取型］の特徴は下記の通りである。

(1) 白眼

(2) 山犬顔

(3) 前垂れ耳

(4) 鼻筋長く面長

(5) 櫛目文の鬣

(6) 衿毛が飾り帯

（4）窖窯 12 期（1430-60）の狛犬

窖窯 12 期になると、伊勝型の展開が見られ、鬣の櫛目文が粗くなり、衿毛左右に分けているが幅広く、飾り帯のような線刻が施されている。その後、伊勝型狛犬は鬣の櫛目文が消えて突帯のみが残ったものとなる。

また、この期には［伊勝型］の特徴と［香取型］の特徴が合体した折衷型が登場する。［伊勝型］の顔面・頭部に櫛目文の鬣と飾り帯が付いたものが出現する。その後、鬣櫛目文が消滅する。

一方、白眼狛犬では香取型が変遷し、やや太くなり鼻先までが短くなった伊勝八幡宮蔵の狛犬がある。その後、香取型狛犬は鼻筋が短く、鼻先が大きく強調され、体部が直立するようになり、根津型へと変遷する。また、［香取型］に［伊勝型］の特徴の立て耳となる白眼狛犬が登場する。

すなわち、窖窯 12 期の 15 世紀前半代に［伊勝型］と［香取型］および、その折中型となる櫛目文の鬣で飾り帯を持つ、瞳眼と白眼の二種の狛犬が登場し、都合四種類が存在することになる。

（5）窖窯 13 期（1460-90）の狛犬

窖窯 13 期になると、伊勝型の狛犬は消滅し、口先が上向きの瞳眼狛犬が登場し、鬣は円錐形の突起が付けられたものが新しい狛犬が登場し、白眼狛犬の特徴である前垂れ耳と飾り縄および櫛目文鬣が施され、後足にも櫛目文が施されている。頭部を鉄釉、下部を灰釉の掛け分けものも存在しており、新しい釉調を求めたものが登場する。灰釉はマット調のもので、年代が下がると推定される。このような櫛目文の狛犬は土岐市・日向窯出土狛犬に同類の施文狛犬が認められ、本期に比定されるものと推定されるものである。

また、白眼狛犬は直立化が進み、鬣の櫛目が粗くなり、窖窯終末期の形態に変化する。

3 大窯期の狛犬編年

1490 年代には窖窯から大窯への転換が起こり、窯構造の転換とともに焼成品の転換が起こり、狛犬も新型に転換した。

大窯Ⅰa 期の初源期の狛犬は、円筒形を体部とし、その上端を粘土板で塞ぐようにしてその上面に瞳眼・鼻筋・立て耳を付け、丸紐状の前足と後足を付けて台座板に蹲踞した姿勢にしたものである。

また、白眼の狛犬は、瞳眼の狛犬と同様な形態であり、立て耳となるものである。

16 世紀代の狛犬は、窯跡資料が少ないことから、形態の変遷が不詳である。大窯Ⅲ期（1570-80）に編年される清洲城下町遺跡出土の狛犬は再び顔面が強調される造形となっている。

その後、頭部が大きく造形されるようになり、顔に表情豊かなものが造られるようになる。その顔面は黄瀬戸獅子型香炉の貼付獅子頭と類似したもので、黄瀬戸の年代観から大窯Ⅴ期（1590-1607）に編年されることが推定される。

慶長 12 年を境にして連房式登窯が導入されると、銅緑釉（織部釉）を中心にして織部陶器生産が盛んとなり、総織部狛犬や獅子香炉などの顔面は類似し、彫刻された獅子顔が登場す

るところとなる。

おわりに

陶製狛犬は、13 世紀末の窖窯 7 期（1280− 1310）の瀬戸窯で焼き始められ、その形態の特徴から瞳を刺突文で表現した瞳眼と瞳のない白眼のタイプに分類される。初源期の狛犬は瞳眼の獅子形顔の造形が登場し、萱刈窯跡出土品を標識として萱刈型とした。14 世紀後半の窖窯 10 期（1370− 1400）には山犬型が新たに出現し、その古式のものとして深川型と呼んで分類し、小形の細身の類型品に移行した形態の応永 20 年（1418）墨書銘のある伊勝八幡宮蔵品を標識として伊勝型が登場した。深川型および伊勝型の特徴は、立ち耳、貼付突帯の鬣、衿毛を持つ形態のもので、以後、15 世紀末までの窖窯期の主流として存続した。

一方、白眼形の狛犬は深川型に一段階遅れて窖窯 11 期（1400− 30）の 15 世紀初めに出現し、その特徴は前垂れ耳、櫛目鬣、首元に飾り帯を持つ形態のもので、香取神宮蔵品を標識として香取型と呼んで分類されている。香取型は終末の窖窯 13 期（1460− 90）には直立形に変化し、伝千利休所持の根津美術館蔵品を標識とし根津型に分類している。以後、深川型と並んで 15 世紀末の窖窯期の型式として存続した。

このように中世瀬戸窯における瞳眼狛犬の伊勝型と白眼狛犬の香取型の二筋の系列に分かれた狛犬は、窖窯 12 期（1430− 40）になると、両者の特徴が入り乱れた折衷型が登場するところとなった。瞳眼狛犬は櫛目鬣と飾り帯を持つ狛犬と飾り帯を持つ狛犬の二種類が出現し、窖窯 13 期の終末期には白眼狛犬の特徴の前垂れ耳、櫛目鬣、飾り帯の造形が出現した。また、白眼狛犬は窖窯 12 期（1430− 60）に立ち耳を持つ狛犬が出現した。

15 世紀末瀬戸窯に地下式窖窯から地上式大窯への転換が起こると、従前の山中における操業から集落縁辺の丘陵に窯を移動させるとともに、焼成器種に一大転換が起こった。そうした変革期に焼成器種の転換が生じたが、狛犬生産は絶えることなく存続した。しかし、その形態は大窯期特有の形態に変化し、窖窯期の狛犬から転換した。

大窯期の狛犬は、体部を円筒形として写実性から離れ、その先端部に扁平の顔を付加し、丸紐上の手足を陶板上に蹲踞させる造形となった。瞳眼狛犬が主流で、白眼狛犬は大窯期の初めに見ることができるのみで途絶した。

大窯期の狛犬は、僅かながらの生産が継続されたと予想されるが、窯跡出土資料がほとんど確認されないことから、城下町遺跡などの集落遺跡出土品から推定される程度である。

大窯Ⅴ期（1590− 1607）なると、狛犬の造形は狛犬以外の黄瀬戸獅子形香炉や次に登場した連房Ⅰ期（1607− 23）の総織部獅子鈕香炉や南蛮人燭台などの形象物において見られるように、その造形手法に変化が認められる。顔の造形は彫刻による造形に転換するとともに、連房期の狛犬は高さ 20 ㎝を越える大形品に移行し、神社奉納品の性格として誇示する性格を強く表したものとなった。

註

(註 1) 愛知県陶磁資料館『愛知県陶磁資料館所蔵品図録』1988、同『愛知県陶磁資料館所蔵品図録Ⅱ』1998、同『愛知県陶磁資料館所蔵品図録産』2008
(註 2) 本多静雄『陶磁のこま犬』求龍堂 1976
(註 3) 戸田紋平「陶製こま犬」『陶説 136』日本陶磁協会 1964
(註 4) 赤塚幹也『瀬戸市史 陶磁史篇 1』瀬戸市 1969
(註 5) 楢崎彰一『日本の美術大 133 号 古瀬戸』至文堂 1977
(註 6) 青木修他『瀬戸窯- 瀬戸市内重要遺跡試掘調査報告- 』㈶瀬戸市文化振興財団 2008
(註 7) 愛知県陶磁資料館『愛知万博記念特別企画展桃山陶の華麗な世界』2005
(註 8) 楢崎彰一『知多半島古窯址群』愛知県教育委員会 1962

なお挿図は愛知県陶磁資料館『陶磁のこま犬百面相』2006、同『桃山陶の華麗な世界』2005、本多静雄『陶磁のこま犬』求龍堂 1976、戸田紋平「陶製こま犬」『陶説 136』日本陶磁協会 1964 より転載。

鎌倉・室町・安土桃山の陶製狛犬編年表

			瞳　眼		白　眼	
1280	窖窯（Ⅲ期）	7	【瞳眼狛犬の特徴】 1　立ち耳 2　隆起鬣 3　衿毛	 洞山窯		【白眼狛犬の特徴】 1　前垂れ耳 2　櫛目鬣 3　飾り帯
1310		8		 赤津長根窯 萱刈型 萱刈窯		
1340		9		 孫右衛門窯		
1370	窖窯（Ⅳ期）	10	深川型 深川神社蔵	 豊蔵資料館蔵		
1400		11	伊勝型 應永廿五年銘（1418）　伊勝八幡宮蔵			香取型 香取神宮蔵
1430						

			瞳　眼		白　眼	
1430	窖窯（Ⅳ期）	12	名古屋市博物館蔵	【折衷型】 【櫛目鬣】 【飾り帯】	【折衷型】 【立耳】 鹿島神宮蔵	伊勝八幡宮蔵
			鹿島神宮蔵	【飾り帯】 豊蔵資料館蔵		
1460		13	菊畑窯	日向窯 【前垂れ耳・櫛目鬣・飾り紐】		根津型 根津美術館蔵
1490	大窯	Ia	昔田窯 小名田窯下窯			
		Ⅲ	清洲城下町遺跡			
1600		Ⅴ				
1607	登窯					

井上喜久男作成